

人材、資金：提案相次ぐ

活動を考える若い世代

韓国・江華島南部に 瑚さん(18)は「雑草が約100平方メートルの広 伸び放題で周囲がきれいな干潟がある。「グ いになっていない。観 ラウンドワーク三島 光面でのアピールがな (GW三島)」の公募 い。継続的に保全に取 に応じ訪韓した日本側 り組む人材がいらない」 学生と韓国側学生はそ と指摘。「これらの課 れぞれグループを作 題に先立つのが資金問 り、干潟センターを会 題。特産のブドウやサ 場に、江華島のバイカ ツマイモを販売し、収 モの育つ水田の抱える 益の一部で有償の保全 課題について考えた。 ボランティアに支払う 静岡大1年の上田啓 仕組みを作ってはどうか」とし、ソーシャル ネットワーキング・ サービス(SNS)の 活用も提案した。

江華島の干潟
漢江、臨津江、礼成江の3本の大河が上流から運ぶ豊かな土が堆積(たいせき)しており、土の中の虫や貝をついばむ野鳥の楽園。鹿児島、台湾、オーストラリアへとつながる東アジアの渡り鳥の飛行ルートとなっている。絶滅危惧種のヘラサギ約3600羽が生息することで知られる。

海越え続く

環境の道

グラウンドワーク三島の挑戦

中

討論と現場体験共有し引き継ぐ



グループに分かれ討論する日韓の学生＝韓国・江華島の干潟センターで

か」とし、ソーシャル ネットワーキング・ サービス(SNS)の 活用も提案した。 上田さんは高校時代 からごみ拾いの活動を 続けており、環境と防 災を学ぶため静岡大地 域創造学環境防災コ ースに進んだという。 教育面での課題を検 討したのが山梨県立巨 摩高2年、野中菜々美 さん(17)。「バイカモ センターを作り、バイ カモについての調査研 究を先輩から後輩に引 き継ぐ。小さい時から バイカモに親しむた め、子供が遊びながら 触れ合えることが大切 だとも思う」と話した。

巨摩高校自然科学部は ホタルの研究を先輩か ら後輩へと長年引き継 いでおり、その経験か ら提案したという。

これに対し韓国側学 生の提案は「バイカモ の水田で作られるお米 を一般のお米より高く 売れるよう政府が支援 する」「保全には若者 のボランティアが必要 ではないか」など。

発表を聞いた都留文 科大2年の福田果凛さ ん(20)「富士宮市出身 」「日本側は地元の高 齢者の活躍を考えると 自分たち若い世代が活 動を考えると対照的。韓 国の学生は『やろう』 という意志が強い」と 感想を話した。

討論の後、日韓の学 生は干潟を歩きなが ら、潮流で運ばれる漁 網やプラスチック、発 泡スチロール箱などご みを集めた。討論と現 場体験を共有し交流は 次世代に引き継がれ る。